RIVER FUND

河川基金だより

Good Practices of
the Outcomes Supported by
the River Fund

川を愛する人のために

河川基金

2017
October

Vol. 37

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

「つながり」を生む河川教育

大田区立嶺町小学校（東京都）　主任教諭　篠 政博 さん　元教諭　牛島 貞満 さん

「人為的改変による生態系への影響評価」を軸に様々なテーマで挑み続ける若き研究者

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター（岐阜県）
専門研究員　末吉 正尚 さん

この笑顔に会いたくて

NPO 法人 暮らし・つながる森里川海（神奈川県）　理事長　臼井 勝之 さん

公益財団法人
河川財団

北上川
アクアレンジャーの育成

一般社団法人 いわて流域ネットワーキング（岩手県盛岡市）

いわて流域ネットワーキングでは、安全な川での体験活動の普及を目的に、大学生、専門学校生、20 代の若者を対象として、川の行事や子ども達の川体験活動をサポートできる人材（アクアレンジャー）を育成しています。「北上川アクアレンジャー育成講習会」入門基礎編の参加者は、岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学の三つの大学からと、盛岡医療福祉専門学校からの合わせて 62 名。受講者が大学生や専門学生がほとんで、なおかつ、保育士免許、幼稚園教諭、教員習得課程の学生が大半を占めていたため、今後それぞれの場で活躍し、川での安全な体験活動を普及してくれることが期待できます。

河川基金は、川づくり団体「一般社団法人 いわて流域ネットワーキング」を応援しています。

【写真】一般社団法人 いわて流域ネットワーキングにおける活動（川遊びのサポーター「北上川アクアレンジャー」の育成）

河川基金へのご寄付は
全国の川をより良くする活動へと
つながっています。

河川
基金

INDEX

TOPICS

04 平成 30 年度河川基金助成の募集を開始します

07 平成 29 年度河川基金研究成果発表会
- 河川を取り巻く課題に挑む研究者達 -

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

河川基金だよりでは、様々な川づくり活動に取り組む皆さまにとって、その活動の参考となるような Good Practice についての情報発信と共有を目指していきます。

今回は、河川基金を活用して全国各地で活動されている方々のなかで、学校での河川教育については篠政博さんと牛島貞満さん、河川に関する研究については末吉正尚さん、川づくり団体については臼井勝之さんから、その活動の様子やメッセージをお聴きしました。

09 「つながり」を生む河川教育

大田区立嶺町小学校（東京都）　主任教諭　篠 政博 さん　元教諭　牛島 貞満 さん

12 「人為的改変による生態系への影響評価」を軸に様々なテーマで挑み続ける若き研究者

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター（岐阜県）　専門研究員　末吉 正尚 さん

15 この笑顔に会いたくて

NPO 法人 暮らし・つながる森里川海（神奈川県）　理事長　臼井 勝之 さん

INFO

18 紹介 水難事故を防止する取組「ライジャケ・オン」

19 御礼 ご寄付の御礼

19 紹介 河川財団が「紺綬褒章」公益団体として、内閣府より認定

[表紙写真]
うのき水辺の楽校
「多摩川ガサガサ体験・生き物調査」

[発行]
公益財団法人 河川財団

[編集・デザイン]
公益財団法人 河川財団 基金事業部

TOPICS

平成 30 年度河川基金助成の募集を開始します

募集期間

平成 29 年 **10 月 1 日**（日）9 時～**11 月 30 日**（木）18 時まで

募集期間

インターネットによるオンラインで申請してください。
※詳細につきましては河川財団ホームページにてお知らせいたします。
www.kasen.or.jp

3 部門（河川基金）

河川基金助成の 3 つの部門

1　研究者・研究機関部門

河川や流域に関係する調査・研究を行う、研究者や研究機関への助成

【写真提供】 土木研究所　自然共生研究センター

2　川づくり団体部門

河川や流域への理解を深めたり、健全な姿に変えるための活動などを行う市民団体等（川づくり団体）への助成

【写真提供】 NPO 法人暮らし・つながる森里川海

3　学校部門

学校教育現場で、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する河川教育に取組む、小・中・高校等への助成

【写真提供】 大田区立嶺町小学校

河川財団では、昭和63年に河川基金（旧名称：河川整備基金）が創設されてから、約30年にわたり助成事業を進めてまいりました。

これまで助成を通じ、多くの研究者や研究機関、市民団体、学校の活動を支援してきました。

このたび、平成30年度の河川基金助成の募集を開始いたしましたのでその概要をご案内いたします。

平成30年度より、学校部門に新たに「河川教育とりくみ支援」助成を設ける等、河川教育を取り入れようとする学校の支援を充実させました。

これからも河川基金助成が多くの方々に活用され、人々の河川への理解が深まり、人と川との良好な関係がさらに強いものとなるよう弛まぬ改革を進めてまいります。

多くの皆様からのご応募を心よりお待ちしております。

河川基金助成の充実化 POINT

学校部門の
助成制度を充実
しました

POINT
1 「河川教育とりくみ支援」助成を新たに設けました。

新たに「河川教育とりくみ支援」助成を設け、
初めて河川教育を取り入れる学校の支援を行います。

「河川教育とりくみ支援」の新設

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等において、河川教育に取り組む準備のための次の活動に対し支援を行います。

①教科学習、総合的な学習等における河川教育プログラムの作成
②学級単位での川や水辺などでの体験活動（1 単元から対象とします。）
③河川教育を推進するための体制づくり

教育活動計画助成

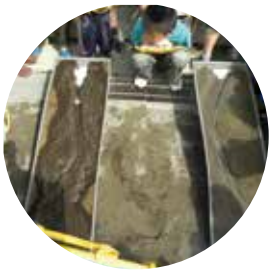
- 河川教育とりくみ支援【学級単位等】 NEW
- スタートアップ【単学年】
- アドバンス【複数学年】

調査・研究助成

- 河川教育に関する実践的研究【学校全体】

POINT
2 学校部門の助成金額を増額し支援の拡充を図りました。

「小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等」の「スタートアップ」・「アドバンス」・「河川教育に関する実践的研究」に対する助成金額をそれぞれ増額しました。



POINT
3 学校部門の連続助成期間の延長ができるようになりました。

現行では、スタートアップ、アドバンスの同一レベルで連続して申請できる期間を 3 年としていますが、プログラムに新たな工夫や改善を行い河川教育を充実する場合は、引き続き同一レベルでの申請もできるようになりました。

平成 30 年度　河川基金　助成一覧

助成部門	助成対象者	助成区分	期間	助成金額
研究者・研究機関部門	研究機関	一般的助成	1 ～ 2 年	200 万円（上限）
		緊急災害調査	1 年	300 万円（上限）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 A	1 年	200 万円（上限）
	一般研究者	一般的助成（60 歳未満の研究者）	1 ～ 2 年	100 万円（定額）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 B	1 年	100 万円（定額）
		アウトリーチ活動 C	1 年	50 万円（定額）
	若手研究者	一般的助成（35 歳以下の研究者）	1 ～ 2 年	60 万円（定額）
	ジュニア研究者（クラブ活動）	高等学校のクラブ活動	1 年	50 万円（定額）
		中学校のクラブ活動	1 年	30 万円（定額）
川づくり団体部門	流域川づくり団体	活動 A	1 年	100 万円（定額）
		活動 B	1 年	60 万円（定額）
		活動 C	1 年	30 万円（定額）
	全国川づくり団体	活動 A	1 年	500 万円（上限）
		活動 B	1 年	100 万円（定額）
	新設川づくり団体	新設川づくり団体自立支援助成	1 ～ 5 年	毎年 50 万円（定額）
学校部門	幼稚園、保育所、認定こども園等	幼稚園、保育所、認定こども園等	1 年	10 万円（定額）
	小、中、高等学校、特別支援学校等	**河川教育とりくみ支援　【新設】**	**1 年**	**10 万円（定額）**
		スタートアップ（単学年での取り組みが対象）	1 年	**20 万円（定額）**
		アドバンス（複数学年での取り組みが対象）	1 年	**40 万円（定額）**
		河川教育に関する実践的研究（全校体制での取り組みが対象）	1 年	**60 万円（定額）**

※中学校・高等学校におけるクラブ活動は、「研究者・研究機関部門」のジュニア研究者（クラブ活動）へご応募いただけます。

TOPICS

平成 29 年度河川基金 研究成果発表会

- 河川を取り巻く課題に挑む研究者達 -

平成 29 年 7 月 27 日、東京大学伊藤国際学術センターにて平成 29 年度河川基金研究成果発表会が開催されました。本発表会では、平成 28 年度に河川基金による助成研究を完了した受けた全ての研究者・研究機関の皆様に研究成果の発表をしていただいており、今回は１１４名の方々による口頭発表とポスターセッションが行われました。

受賞者の皆様との記念撮影（平成 29 年度河川基金　研究成果発表会）

河川基金研究成果発表会は、河川基金による研究の成果をできるだけ多くの方に知っていただくとともに、「川づくり」に関する研究の更なる発展と助成事業の一層の充実を図ることを目的に毎年開催しております。

本発表会の特徴は、助成事業者の全員に発表していただき、成果の概要を説明する「口頭発表」と、発表者と参加者の間で質疑応答や意見交換を行う「ポスターセッション」の二部構成で実施していることです。

今年は、平成28年度に研究者・研究機関部門の助成事業を完了した１１４名の発表が行われ、総勢２３０名の参加者がありました。特にポスターセッションでは、各ブースで熱心に質疑応答や議論をする多くの姿が見られました。

【1】優秀発表者賞に選ばれた大阪市立新北島中学校の発表
【2】ポスターセッションの様子

発表会の最後には、これまで河川基金助成を受けた研究者の中から、今後の活躍が期待される優秀な若手研究者を表彰する河川財団奨励賞の表彰が行われました。

また、今回発表された平成28年度完了の河川基金助成研究のうち優秀な成果を表彰する優秀成果賞（９名）と、当日のプレゼンテーションについて聴講者による投票で選ばれた優秀発表者賞（２名）の表彰が行われました。

そのなかでも優秀成果賞と優秀発表賞のそれぞれで中学生の研究者が表彰されるなど、ジュニア研究者の活躍が注目された発表会でもありました。

今回は総勢２３０名の皆様に参加を頂き、大盛況のうちに終了いたしました。多くの皆様のご来場、誠にありがとうございました。

受賞者一覧　（順不同、敬称略）

所属機関名	代表者	助成事業名
河川財団賞	河川基金助成による研究成果をもとに、卓越した功績を上げた助成研究者を表彰するもの	
該当者なし		
河川財団奨励賞	今後の活躍が期待される、河川基金助成を受けた優秀な若手研究者を表彰するもの	
大阪薬科大学大学院	東 剛志	河川環境中に存在する抗がん剤成分の環境動態に関する研究
優秀成果賞	平成 28 年度に完了した河川基金助成研究のうち、優秀な成果を表彰するもの	
九州大学	厳島 怜	河口域の環境保全・自然再生のための河川改修技術の構築に関する研究
埼玉大学大学院	田中 規夫	粗粒化河床構造の変化と水生生物の動態を考慮した適切な土砂還元量の研究
北海道大学大学院	清水 康行	流砂系シナリオの変化と砂州と蛇行の挙動
北見工業大学	渡邊 康玄	礫河原再生のためのダム放流による派川維持手法の開発
山口大学大学院	鈴木 素之	ジオスライサー調査と古文書解析による佐波川沿いの洪水・土石流発生ポテンシャルの変遷の評価
山口大学大学院	神野 有生	UAV を用いた高密度・高効率な河川測量技術の検証
北海道大学	阿部 博哉	北海道沿岸域の生物生産性に果たす湿原河川の役割の定量的評価
土木研究所水環境研究グループ自然共生研究センター	坂本 貴啓	人口減少社会における「いなかの川」の河川管理に関する調査研究
山県市立高富中学校	三宅 遥香	守れ！ ふるさとのヒダサンショウウオ
優秀発表者賞	研究成果発表会において、当日の聴講者による投票で選ばれた優秀な発表者を表彰するもの	
東京大学大学院	知花 武佳	中山間地域における人の暮らしが河相に及ぼしてきた影響の把握と今後の変化に関する考察
大阪市立新北島中学校	宮原 光来	大和川河口部付近の水質調査研究２（イオンの変化を中心に）～持続可能な開発のための教育（ESD）の視点に立って～

平成 29 年度「河川教育研究交流会」及び「川づくり団体全国事例発表会」の開催発表　【お知らせ】

河川財団が運営する河川基金助成では、人々の川への理解が深まり、人と川との良好な関係がさらに強まることを目指して、より良い「川づくり」に貢献する研究者、市民団体、学校などの活動を支援しています。

今回は平成 28 年度に完了した助成事業の成果について、広く市民団体、行政、民間企業、学校などの皆さまと情報共有・意見交換をするとともに、今後の活動の参考として頂くことで皆さまの活動が一層充実したものとなるよう、発表会・研究交流会を開催します。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なおプログラムの詳細等は、河川財団のホームページをご覧ください（後日掲載予定です）。

河川教育研究交流会

学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する“河川教育”に取組む小・中学校等の助成事業の成果発表を行います。

平成 30 年 1 月 27 日（土）　場所：東京大学　小柴ホール

川づくり団体全国事例発表会

人々の河川や流域への理解を深めたり、川を健全な姿に変えるための活動などを行う市民団体等（川づくり団体）の助成事業の成果発表等を行います。

平成 30 年 1 月 28 日（日）　場所：東京大学　小柴ホール

大田区立嶺町小学校の前に広がる多摩川下流（河口から約 12 ㎞）で、
生き物を採集する４年生（2017 年９月「生き物調べⅡ」）

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

「つながり」を生む河川教育

大田区立嶺町小学校（東京都）
主任教諭　篠 政博 さん　　元教諭　牛島 貞満 さん

河川教育の導入のきっかけや経緯

本校での河川教育の取組は、平成14年度から開始した総合的な学習の時間がきっかけです。学校の目の前に広がる多摩川を活かした活動を行おうと、当時の教員によって始まったと聞いています。（篠先生）

私が嶺町小に赴任した平成22年当時の活動は、川に入る体験を重視した活動でした。1年生から全学年が多摩川に入ることに驚きました。そのため、１００以上のライフジャケットが学校にあり、箱メガネやスローロープもありました。でも生き物調査はやっていませんでした。それはもったいないと考え、国土交通省京浜河川事務所田園調布出張所の助言で、川崎河川漁業協同組合から採捕の了解をもらい、タモ網を持って生き物調査の活動を行うようになりました。それから毎年少しずつ内容を変えながら多摩川を活用した取り組みを進めてきました。

当時のテーマは「多摩川で遊び学び、奉仕する」として1・2年生で石拾い、3・4年生で箱メガネで川の中を見たり、中州まで歩いて行ったり、5年生で川流れ体験、6年生で河川敷の清掃活動を行っていました。現在でも1年生から6年生までが多摩川に触れる活動を行うなど特色のある学校として地域に根付いています。目の前の下流域だけでなく、河口干潟を調べたり、上流を見学したりすることによって、単なる体験に終わらせず、比較や課題発見を行いながら活動しています。（牛島氏）

6年生では学習の集大成として、「私の多摩川研究」と題したレポートを作成します。これまでに学んできた内容を本の形式にまとめます。3年生と4年生での生き物調べが学習のベースとなり、5年生と6年生の2年間をかけて多摩川のことを深く学びます。例えば、水生昆虫の羽

「つながり」を生む河川教育

採ってきた生き物を図鑑で調べる

大田区立嶺町小学校での河川教育の取り組み

大田区立嶺町小学校は、多摩川から校舎までわずか 200m。この恵まれたフィールドを有効に活用し、子供たちにとってより魅力的な教育活動にしていきたいと願い、校内研究に取り組んできました。

「多摩川での学習活動が、都会で暮らす子供たちにとっての自然の原体験になる。」「教師も多摩川から学び、子供たちと一緒に多摩川で様々な発見をし、それに感動し、共有する。」というテーマを掲げ、「多摩川から学ぶ活動」を継続して実施しています。

平成 14 年度からスタートさせたこの活動は、現在１年生から６年生まで全学年が「学びのスパイラル」を意識するカリキュラムへと発展しています。

化のシーンを観察する児童一人一人が異なる課題を見つけながら、３年生から毎年学んできた内容を関連付けてまとめています。（篠先生）

多摩川学習のねらい

教育活動であるため、発達段階に応じて毎年リトライを続けながら活動しています。都市部で育った子供たちでも、この目の前の川が自然そのもので原体験を育む場です。このような体験をして育った子供たちは、多分河川敷でたばこの吸い殻は捨てない大人になるでしょう。将来他の地域に住んでもこの自然を忘れないでいて欲しいと思います。（篠先生）

子供たちの変容や教育効果

多摩川学習の特徴は、単年度で完結せず、複数年続くことです。自分で学習した事を毎年まとめたり、発信したりしながら、学年が上がるごとに深めていきます。下の学年は上級生の活動を見ています。次の学年で何をやるのか、子供たちは期待感を持って進級します。表現力や伝えることの工夫を凝らしながらレベルアップすることができます。こうした活動を行うことで他の教科の学習についても関心や意欲が高くなっていることを実感しています。子供たちの変容について綿密なアンケート調査を行い、分析をするという定量的な評価はしていませんが、こうした感覚評価も数が集まれば変容の根拠になると思っています。（篠先生）

川の学習を継続させるために

川の学習を継続させるには、学校単独の活動では難しい面があります。安全面では、保護者がとても協力的で川に入る時は、大勢サポートしてくれます。優れた河川教育を行っている学校は、地域の専門家の支援を受けています。魚・野鳥・植物、歴史、安全管理など、専門家の力を借りることができれば、教員の異動や生き物等に関する知識不足をカバーすることができます。幸いこの地域でも４年前に「うのき水辺の楽校」が発足して授業支援を始めました。私も教員はやめましたが、外から水辺の楽校のスタッフとして、多摩川活動を応援する側になっています。また、専門的な地域を持った方々の協力も得られるようになってきました。（牛島氏）

もう一つの要素は、若い世代が活動の輪に加わることで、教員や地域の励みになっています。今日（取材の日）は「うのき水辺の楽校」のガサガサ体験の日ですが、６年生が、川のリーダーとして、生き物の採り方や見分け方を教えています。また、嶺町小を卒業した中学生もボランティアで参加をしています。この子供たちは、川に詳しく、教え方も上手です。水辺環境は、安全に川と触れ合うための施設やルール作りも大切ですが、川の楽しみ方を知っている人を育てることも必要です。（牛島氏）

ほかにも、私たち教員自身が川を知る必要があります。教員が川を知った上で教材をつくる。それが生きた教材となり、子供が変わるようになります。教員が子供たちと一緒に生き生きと学ぶことが大切だと思います。（篠先生）

活動を行う資金や地域の理解、教員の熱意等の要因をうまく組み合わせていくことです。そして、水難事故が起きないように最善の準備を行い、安全を確保することが最も重要です。（牛島氏）

「つながり」のある川の学習

生き物調べは生き物の名前を覚えることが目的ではありません。ともすれば外部の講師が生き物の名前や生態について全部教えてしまい、次の学習につながらないことがあります。学習の面白さは、分からないことを自分で調べることにあります。指導者は、子供たちから疑問が出た時に、解決の方法を一緒に考え、行

「つながり」を生む河川教育

動することが大切です。

川の可能性は「つながり」だと思います。生き物同士のつながり、生き物と人とのつながり、歴史のつながり、地域のつながりなど、「つながり」を自分で発見し、探求することで学びの達成感が得られます。調べていく中で、子供だけでは解決できない「壁」にぶち当たります。自分で実験や観察を行って、検証する子供もいます。さらにそれが正しいかを埼玉県立川の博物館員に手紙を書いて問い合わせをしたりしました。また、発表が苦手な子供が、多摩川水辺の楽校のシンポジウムで発表者となり自信をつけたりもしました。川の活動は、多様で広がりがあり、つながりを生み出し、自己成長とって最適な教材の一つです。（牛島氏）

目の前の川が教材になるというのはとても有り難いことです。生きた教材を用いることで子供たちが目を輝かせて活動します。目の前の川がこの学校にとって必要な川です。この地域の資源を活用することで地元愛が育まれると思います。インターネットや本からでも「川の勉強」はできます。プリントアウトしたものや本に書いてあることをよく意味が分からないまま、見栄え良く発表することもできます。しかし、自分で体験したことや、身近な生き物や人に触れることで調べたり、考えたりしてこそ得られる学びというものもあると思います。（篠先生）

課題と目標

２０２０年度から小学校で全面実施される次期学習指導要領では、他教科に必要な時間が増えます。そのため現在総合的な学習の時間の内容もブラッシュアップし持続可能なものにして行く必要があります。

教員自身も、川の活動を何年も経験すれば、川の魅力を伝えるスキルや知識を持つようになりますが、赴任してきたばかりだとハードルが高いかもしれません。そうした教員にどう川の魅力や経験を伝えるかが、目下の課題です。子供と一緒の目線で川の面白さを伝えられる教員を増やしていくことが必要だと思います。（篠先生）

さらには、教材等も課題があります。子供たち自らが調べることが重要ですが、小学校３年生ぐらいの知識レベルで理解できる図鑑は多くありません。子供たちが使いやすいノウハウが詰まった教材の作成など、水辺の楽校として支援できることがあると思っています。（牛島氏）

今後の河川教育への期待

意外にも、子供の頃川で遊んだ経験をもつ他府県出身の学生によく出会います。川体験の増加により、川との上手な付き合い方の必要性が高まってくるでしょう。嶺町小の卒業生も、中学校・高校では部活などで一度は川からは離れるかもしれません。でも大学生や大人になった時、川体験の楽しい思い出は、自然を大切にする選択につながると思います。

今の親世代が子供の頃は、河川の汚濁により川から離されていましたが、これから川で育った世代が親や教員になってきます。地域の保護者として学校を支援することもあるでしょう。日本全国に川という資源があります。これを地域や学校でうまく生かすことができれば、よりよい社会になっていくと思います。（牛島氏）

（写真左）
篠 政博　Masahiro SHINO

大田区立嶺町小学校　主任教諭

東京生まれ。青山学院大卒。東京都調布市の小学校で河川教育のおもしろさを知り、多摩川と出会う。2011 年から嶺町小学校に勤務。2014・2015 年度に研究推進委員長として、「多摩川から学ぶ」をテーマに多摩川のフィールドを活かしたカリキュラムをまとめた。2016 年川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・流域圏、2017 年河川教育研究交流会で、同校の取組を報告した。

（写真右）
牛島 貞満　Sadamitsu USHIJIMA

元大田区立嶺町小学校教諭
現　うのき水辺の楽校　事務局

東京生まれ。玉川大学教育学部通信教育課程中退。1990 年ごろから多摩川、荒川で合科的な川の学習に取り組む。2010 年から今年の３月まで、嶺町小学校に勤務。退職してからも地域の「うのき水辺の楽校」の事務局を担当し、地域の小学校の多摩川活動の授業支援などを行う。

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

「人為的改変による生態系への影響評価」を軸に様々なテーマで挑み続ける若き研究者

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター　専門研究員　末吉 正尚 さん

大学時代の研究（若手研究者枠優秀成果賞「雪堆積場から融雪水が河川生態系に与える影響及び環境配慮型管理の効果検証」）

河川基金若手研究者枠で優秀成果賞を受賞。北海道大学大学院を卒業後、国立研究開発法人土木研究所 自然共生研究センターで、毎年新たなるテーマに取り組み続け、精力的に活動を行っている末吉正尚さん。今までの研究概要や成果、今後の活動内容や若手研究者へのエール、河川基金に期待することなど様々なことをお聞きしました。

河川基金に応募した経緯

基金に応募をしたのは、北海道大学大学院修士の時で、研究室の先輩がすでに助成を受けていたのがきっかけです。実は、受賞をさせて頂いた若手研究者枠が出来る以前に応募したこともあったのですが、研究計画の至らなさもあり残念ながら採択には至りませんでした。その後4年を経てちょうど学位を取得した年に若手研究者枠の存在を知り、学位後の進路を考える上で個人でも研究予算を獲得しておきたいと、前回とは違うテーマで応募しました。

主な研究内容

大学時代の研究が春の雪解け出水をテーマにしたものでした。冬季に調査地探索のため、雪深い道北を巡る中で、大きな雪山が山腹や河川敷に出来ているのを見かけ、雪堆積場の存在を知りました。その時は、これだけ大量の雪が一気に融けだすと川の水温や流量が変わりそうだなくらいの印象でした。また、生活する中で道路の雪に混じる融雪剤由来の塩で、自家用車の錆びつきも気になっていました。

その後、博士課程を修了し次のテーマを考えていた時に、その光景を思い出し雪堆積場の雪解けの影響を評価し

「人為的改変による生態系への影響評価」を軸に様々なテーマで挑み続ける若き研究者

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センターにおける取り組み

自然共生研究センターは、河川湖沼の自然環境保全・復元のための基礎的・応用的研究を行い、その結果を広く普及することを目的としています。

1998 年 11 月の設立以来、世界に例を見ないスケールの実験河川を中心に、これまで十分に知られていなかった生物と環境の関わりについての研究を進めており、研究の成果は、近年現場の河川管理で活用されています。

また、開かれた研究施設として見学者も受け入れており、研究スタッフが施設を案内しながら施設概要や実験河川の説明を行っています。平日の火・金曜日のみで、事前予約（2 週間前まで）が必要です。

てみようと思ったのです。

札幌市は世界的にも類を見ない豪雪地帯に位置しながらも多くの人口を有する都市なので、市民の生活のためにも除排雪に対して非常に力を入れていました。例えば、年間約２００億円弱（平成28年度）の予算が雪対策に投じられており、約１９００万㎥（平成26年度）の雪が堆積場に運び込まれています。加えて、流雪溝や融雪槽といった都市の中で雪を処理する施設も整備され始めていました。

研究テーマも決まり調査地の選定も済み、調査を始めようとした頃、国立研究開発法人土木研究所に進路が決まりました。この調査は、毎日気温を確認しながら　雪解けにあわせて調査を行う必要があるため悩んでいたところ、当時の研究室の後輩である学生が卒業研究としてやってみたいということで、共同で研究を行い、成果を出すことが出来ました。

毎年新たなるテーマでの挑戦

平成27年度は雪処理という地方事業の評価、平成28年度は床固めブロックの表層構造による生態系機能の違い、平成29年度はダムによる様々な環境改変要因の相対的影響評価と毎回テーマを変えて河川基金に応募していますが、軸となるのはいずれも「人為的改変による生態系への影響評価」です。

何をテーマにするにしても国内または世界的に新規性があり、自分が興味を持てる研究を選ぶように心掛けています。平成29年度の募集要項では、「自然科学で求められる真理の探究」が必要条件であることも記載されており、特にこの部分は研究者として大事だと考えています。私がずっと抱き続けている興味は、自然撹乱と人為的改変による生態系の変化です。そのため、環境が大きく変わった際に、生物はどうやって生き延びているのか、なぜ現在その環境にその生物は生息しているのかといったことを明らかにしようと取り組んできました。

応募する際には、基金が掲げている成果「川づくり」をキーワードに実際に河川で起きていることや、周囲の人達の関わりの中からテーマを模索しています。

研究者を志したきっかけ

具体的に研究者を意識したのは、修士2年の初めごろでした。もともと、子供のころから周囲に田んぼや山がたくさんある様な場所で過ごしたこともあり、生き物がたくさんいる自然が私の原風景として刻まれています。小中学校の時は、漠然と生物に関わる職に就きたいと思っていました。その後、信州大学に進学し、卒業研究を終えた時に、自分が疑問に思っていたことが世界的にも解明されていないことを知り、もっと研究を深めたいと北海道大大学院に進みました。博士課程も過ごした研究室ですが、今まで自分が抱いた疑問に対し、自分で研究デザインを考え、調査計画を練り、実際に調査し、そして自ら予想した調査結果が得られた時の達成感が、漠然とした研究者としての将来を示してくれました。

博士課程を終え、研究者の道へ

研究者としてスタートしていく中で、土木研究所 自然共生研究センターは、信州大学の頃からセンターの方々も含め知っておりました。当時の指導教員が知り合いだったこともあり、一緒に調査に行ったこともあります。その当時のセンターの印象は、多くの研究者が河川で起きている問題に対して学術的にしっかり取り組み、論文を書いている研究集団という、憧れの職場でもありましたので、学位をとり少し経った頃に専門研究員の公募が出ていることを知り応募しました。

センターで今私が取り組んでいる研

「人為的改変による生態系への影響評価」を軸に様々なテーマで挑み続ける若き研究者

究は、ダムによる分断化が魚類の個体群維持に与える影響評価というテーマです。現在の日本には、約２８００基の大ダム（堤高15ｍ以上）と膨大な堰が存在し、川を細かい流路へと分断しています。このような分断化されてしまった川で、各魚種が生息・生存するためにどれだけの川の長さや面積が必要か明らかにすることが研究の目的です。主に、河川水辺の国勢調査データを整理し、全国のダム上流の魚類相を比較するデータ解析と、木曽三川を対象とした現地調査からこの課題に対して取り組んでいます。

今後の抱負や取り組みたいテーマ

河川基金の河川財団賞や奨励賞などの表彰は研究者の一つの目標として励みになります。そのためにも、河川基金での助成成果をしっかり公表していきたいです。

今後のテーマとしては、自然撹乱に絡む研究は続けていきたいと思っています。将来的な気候変動下では、雪解け出水が小さくなり、冬の洪水頻度が多くなることが予想されています。本来、生物相はその地域の撹乱システムに適応して成り立っており、中でも撹乱の季節性は非常に重要な要素です。その季節性が変化したときに、生物たちがどう応答していくか予測することが固有の生物多様性を保全するうえでも重要だと思っています。

若手研究者助成枠を積極的に活かしてほしい

学生や研究者を目指す方々にとって、河川基金の若手研究者への助成は、一つの研究を立案し、成し遂げる機会として非常にいいチャンスだと思います。その際には、全てを一人で行わず、周囲の研究者、様々な異分野の方、また同年代と協力して進めることもいいと思います。私の助成研究も様々な方々の繋がりにより、自分の視野が広がり新たな研究テーマへの気づきやひらめきに繋がっています。

若手研究者枠は始まったばかりでもあるので、もっと若手研究者を奨励していることをアピールして頂き、たくさんの修士、博士の学生に応募してもらいたいですね。将来の研究者育成のためにも非常に良い枠組みだと思いますので、今後もずっと続けて頂きたいです。

末吉 正尚　Masanao SUEYOSHI

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター　専門研究員

1986 年生まれ
信州大学では自然の千曲川をフィールドに、自然の洪水という攪乱撹乱が水生昆虫に与える影響、雪融け洪水をテーマに学位を取得に研究を始める。
北海道大学大学院修士・博士課程に進学をし、河川生態学を専攻。雪解け洪水と農地利用による生息場改変の相互作用をテーマに学位を取得。
現職では、ダムによって分断された河川の魚類個体群維持に関するテーマで研究を行っている。

職歴：
2010 年　北海道大学グローバル COE リサーチアシスタント
2012 年　ドイツ陸水学内水面漁業ライブニッツ研究所（IGB）客員研究員
2014 年　北海道大学所属学術研究員
2015 年 5 月より国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター 専門研究員

主な執筆論文：
Sueyoshi et al. (2017)「Response of aquatic insects along gradients of agricultural development and flood magnitude in northern Japanese streams」（Aquatic Sciences）
末吉ほか（2016）「河川水辺の国勢調査を保全に活かす―データがもつ課題と研究例」（保全生態学研究）
Sueyoshi et al. (2014)「The relative contributions of refugium types to the persistence of benthic invertebrates in a seasonal snowmelt flood」（Freshwater Biology）

この笑顔に会いたくて、毎年、熱中おじさんになってしまいます（臼井 勝之さん）

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

この笑顔に会いたくて

NPO法人　暮らし・つながる森里川海（神奈川県）
理事長　臼井 勝之さん

自然が戻れば、子どもたちが遊びに来ると思っていましたが、遊び声が聞こえてきませんでした。子どもたちの自然離れが進んでいることを危惧し、環境学習活動をはじめて17年。今では会員数も100名を超え、年間40回近くの活動を開催しています。

活動をはじめたきっかけ

私自身、1975年から相模川河口の自然を守る会で干潟の保護運動に取り組んできました。当時、潮が引くと広さ5ヘクタールほどの干潟ができ、ゴカイやヤマトオサガニなど、多数の底生生物が生息していました。それを食べに渡り鳥が多数渡来しました。

1996年の時点で196種類もの野鳥が記録された貴重な場でしたが、海岸線の侵食により、干潟面積が減少し、潮が引いても干潟が出なくなってしまいました。いつかの復活を夢に見て代替地を探し、見つけたのが今の「馬入の水辺の楽校」の場所でした。

馬入水辺の楽校は2001年4月に開校しました。国土交通省の水辺の楽校プロジェクトに平塚市が参画し、市民との協働活動により生まれました。

当時、河川敷の大部分は駐車場で、カチカチに踏み固められていました。不法投機や不法耕作が横行し、市民が安心して訪れることのできる場所ではありませんでし

この笑顔に会いたくて

NPO 法人 暮らし・つながる森里川海 における取り組み

馬入水辺の楽校は川の自然と触れ合える場を作ろうと、駐車場や不法投棄などが行われていた場所の自然環境を復元しました。オープンから、16 年が経過し、豊かな自然環境が戻りました。子供達の遊び声が聞こえてこないなど、都市住民や子供達の自然離れが進んでいることを受け、川の自然楽校や野遊びの秋祭り、やぎ島探検や農業体験など、多様な環境学習活動を展開しています。また、地域の環境学習活動の拠点に育てようと、自然観察路の整備にも取り組んでいます。「休日の日にはどこかの団体が何かしらの環境学習活動を実施している」そんな楽校になることをめざしています。

ShonanIkimonoGakkou.wordpress.com（10 月下旬開設予定）

た。

川の自然と触れ合える場にしようと、原っぱやトンボ池、ワンドなど、水辺の自然環境を復元しました。17年経った今、県の準絶滅危惧種であるカヤネズミが生息するなど、相模川でも有数の生物のホットスポットに生まれ変わりました。

活動を継続していくために

参加者を増やすためには、活動の魅力度をアップさせることが重要です。活動が楽しくなくては、人は集まりません。企画に際しては「自分達が面白いと思うこと」が第一条件です。つまらないと思うことは人に勧められません。知恵を絞って企画します。例えば、お魚調べでは「川魚を食べる」など、催しに一工夫いれています。

子どもの頃、大人も子供も、シジミやウナギやドジョウなどを獲りに川に行きました。食べるためにです。そのことを思い出し、企画しました。

まだ試行的な取り組みですが、お魚を獲って、調べて、さばいて、食べる。これが大好評でした。ナマズやヌマチチブ、マハゼなどを用意しました。こんなに食べきれるかなと思うほどの量でありましたが、完食しました。川との距離がグット縮まったと感じました。

心がけているのが知識の押し売りはしないこと。私たちの役割は自然発見、自然体験のサポートをすることにあると思っています。いっしょに驚きを体感することが重要だと思っています。

もう一つ、私たちは参加者をお客様扱いしません。以前は上げ膳、据え膳で対応してきましたが、真の市民活動にならないことから、現在では、会場の設営から片付けまで一緒に行い、自分ごととして参加し、自然に向き合ってもらうようにしています。結果として、主体的に参加してくれる人が増え、「私の水辺の楽校」という意識が芽生えてきました。人と人とのつながりも深まり、街の中で「こんにちは」と挨拶していただけるようになりました。

私は活動が終了すると毎回、河川財団のホームページに活動報告を投稿しています。活動の振り返りにつながり、より良いプログラムづくりにつながります。年間活動報告書も苦労なく作れますので、お勧めです。

「NPO法人暮らしつながる森里川海」としてのスタート

子どもたちや都市住民の自然離れが進んでいます。子どもたちを野に戻そうと多様な取り組みを展開していますが、一隅を照らすことはできていても、本質的な解決には至っていません。学校教育との連携等、地域一体となった取り組みが必要と思っています。

運営態勢の強化も課題です。幹事の高齢化が進み、担い手の育成が急務になっています。

こうしたことから、馬入水辺の楽校から一歩、外に踏み出し、法人化を図ることにしました。

「素敵な未来を子どもたちへ」を合言葉に、生き物と共存したまちづくり、子どもたちを野に戻す取り組み、農業振興による里山環境の保全、暮らしの質を高める取り組み、ネットワークづくりに取り組んでいきます。5月22日に設立したばかりですが、他団体や大学との連携が始まるなど、スタート良しです。ハードルは低くはありませんが、乗り越えることで一歩前進できると思っています。応援よろしくお願いいたします。

この笑顔に会いたくて

3

2

1

4

6

5

新しいまちづくりの活動拠点「暮らしの家おきなや」にて
写真左） 会員　山本達也さん　　写真右） 理事長　臼井勝之さん

臼井 勝之　Katsuyuki USUI

NPO 法人 暮らしつながる森里川海　理事長
（呼称：湘南いきもの楽校）

神奈川県平塚市出身。幼少のみぎり、原っぱ大学校を卒業（先生：シートン動物記、近所のガキ大将）。長じて、日本野鳥の会入会、法政大学野鳥研究会を創設（現在、消滅）
1975 年 相模川河口の自然を守る会事務局として干潟の保護運動を展開。2001 年 馬入水辺の楽校の会入会（現、NPO 法人　暮らし・つながる森里川海）。片手に鍬、片手に双眼鏡をぶら下げ、脱サラ有機農業に励みながら、生き物と共存したまちづくり、子どもたちを野に戻す取り組みに奮闘中。

【1】原っぱは野遊びの天国です。滑り台やブランコ等の遊び用具は要りません。クズのつる１本あればいいのです。熱中縄跳びの始まりです。

【2】原っぱのオギを刈って束ねて立てるとアメリカインデイアンのテント、ティピーが出来上がります。中で食べるお弁当が美味しい！壊すのが惜しいくらいの我が家が出来上がります。

【3】「フォーラムトンボの棲むまちづくり」を組織し、トンボ調査を実施しています。目標は生物多様性地域戦略の策定。トンボ調査を通じて子どもたちを野に戻すことも目的の一つ。

【4】子どもたち自身がトンボやヤゴを図鑑で調べられるよう、「ひらつかトンボ入門図鑑」を発行。初心者が見てもわかりやすい図鑑を作ろうと皆さんにご協力いただき完成しました。

【5】「大人もハマる、草笛教室」ほんの少しの工夫で音が出せるようになります。ピーと鳴った瞬間の笑顔、何回見ても見飽きません。

【6】毎年恒例の「ヤギ島探検ツアー」。以前、ヤギが放たれていたことからそう呼んでいます。大潮の干潮時に歩いて渡れる冒険の島（中州）。ライフジャケットの使い方を学び、魚捕りを楽しみました。今年も 100 人余りの参加者が集まり、川に子どもたちの歓声が響き渡りました。

水や川への知識・理解
を深めるための活動

水難事故防止
ライジャケ・オン!

水難事故を防止する取組「ライジャケ・オン」

水難事故防止「ライジャケ・オン」

（公財）河川財団 子どもの水辺サポートセンター、NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）及び河川管理者、川に関連する活動団体等が連携・協働して、7 月第 1 週の「河川水難事故防止週間」を中心として「ライジャケ・オン・キャンペーン」（「子どもたちを水の事故から守る『ライフジャケットの普及と着用に向けたキャンペーン』」）の取組みを展開しています。

川でのリスク対策にライフジャケット

毎年繰り返される川での水難事故。

川は楽しい場所ですが、リスクもあります。川に入らなくても足を滑らせて転落することもあります。致命的な外傷や低体温症などを除き、水難事故による死因の最も大きな要因を占めるのは、息ができないことによる溺死です。

魚類と違い、人間は水の中では呼吸をすることができません。水の中で活動しようとするためには、常に頭部を水面から出して呼吸をする必要があります。特に河川においては水面下に様々な複雑かつ強い流れがあり、陸上からの目視ではなかなか判別しにくい深みがあります。

このような川の環境下で頭部を水面上に出し続けるには人間の持つ浮力だけでは限界があり、何らかの形で浮力を補う必要があります。

その最も効率的で有効な手段がライフジャケットを着用することです。

平成 29 年 8 月 2 日・3 日に実施された「ライジャケ・オン！～楽しい川遊び～」（国土交通省水管理・国土保全局ブース）。石井国土交通大臣も一緒に、「ライジャケ・オン！」

ライフジャケット着用を推進する活動

河川財団と NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会では、平成 27 年度から「ライジャケ・オン・キャンペーン」（「子どもたちを水の事故から守る『ライフジャケットの普及と着用に向けたキャンペーン』」）を行っています。

平成 29 年度は、子ども霞が関見学デーをはじめとするイベント等で、ライフジャケットの紹介やリーフレットの配布等を行いました。

また、NHK や TBS、日本テレビ、毎日新聞、朝日新聞をはじめとしたテレビ、新聞等への取材協力・映像や分析データの提供等を通じ、水難事故防止に向けた活動を行っております。

マスコミの取材の様子

水辺で活動する際のポイントや川遊びの魅力などを紹介（えんじょいリバー）

水難事故の発生個所や発生状況等を WEB の地図上に表示（全国の水難事故マップ）

河川財団が「紺綬褒章」公益団体として、内閣府より認定

河川財団は、内閣府（賞勲局）より「紺綬褒章」の公益団体認定（褒章条例ニ関スル内規 第２条）を受けました（平成 29 年 6 月 28 日付）。褒章の一つである「紺綬褒章」は、公益のため私財を寄付した方々（個人では 500 万円以上、法人では 1,000 万円以上）を対象としています。

平成 29 年 6 月 28 日以降、河川財団へのご寄付（河川基金への寄付または一般寄付）をいただいた方で上記条件を満たす場合には「紺綬褒章」の授与申請を致します。

ご寄付の御礼

寄付者の皆様へ

平成 28 年 9 月 1 日から平成 29 年 8 月 31 日までの一年間に、「一般財団法人　宮崎大淀川スポーツセンター」や「釧路リバープロテクション 21 の会」、「吉田高樹様」をはじめとする、団体や個人の皆様から 3,811,562 円のご寄付をいただきました。寄付者の皆様に心より御礼申し上げます。

ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人　河川財団
理事長　関　克己

寄付金の税法上の優遇措置について

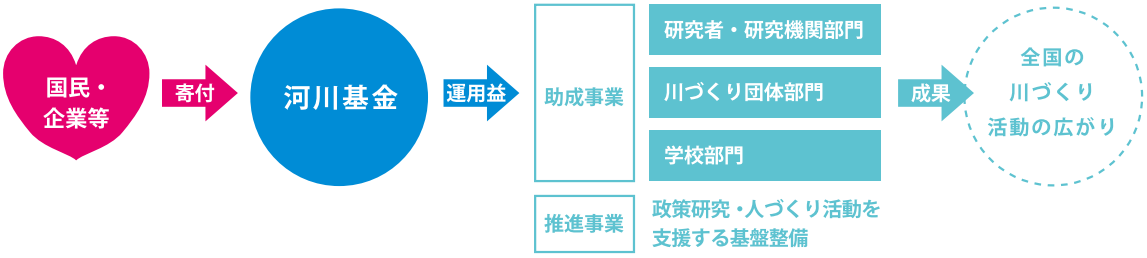
当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人 」としての認定を受けております（認定日は平成 25 年 3 月 21 日、法人登記日は同年 4 月 1 日）ので、当財団への寄付金には上記の河川基金への寄付金及び一般寄付金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。

詳細は河川財団 HP をご覧下さい。

河川財団　検索

「河川基金」とは

昭和 63 年に河川財団（河川環境管理財団）に「河川整備基金」として設立。設立後 30 年近くを経過し、社会情勢の変化等に対応するため「河川基金」として新たなスタートを切っています。



数字で見る「河川基金」

助成件数（昭和 63 年度～平成 29 年度）　約 **10,350** 件

助成総額（昭和 63 年度～平成 29 年度）　約 **117** 億円

河川財団は、我が国の助成財団の中で、助成等事業費で 45 位にランキングされています。

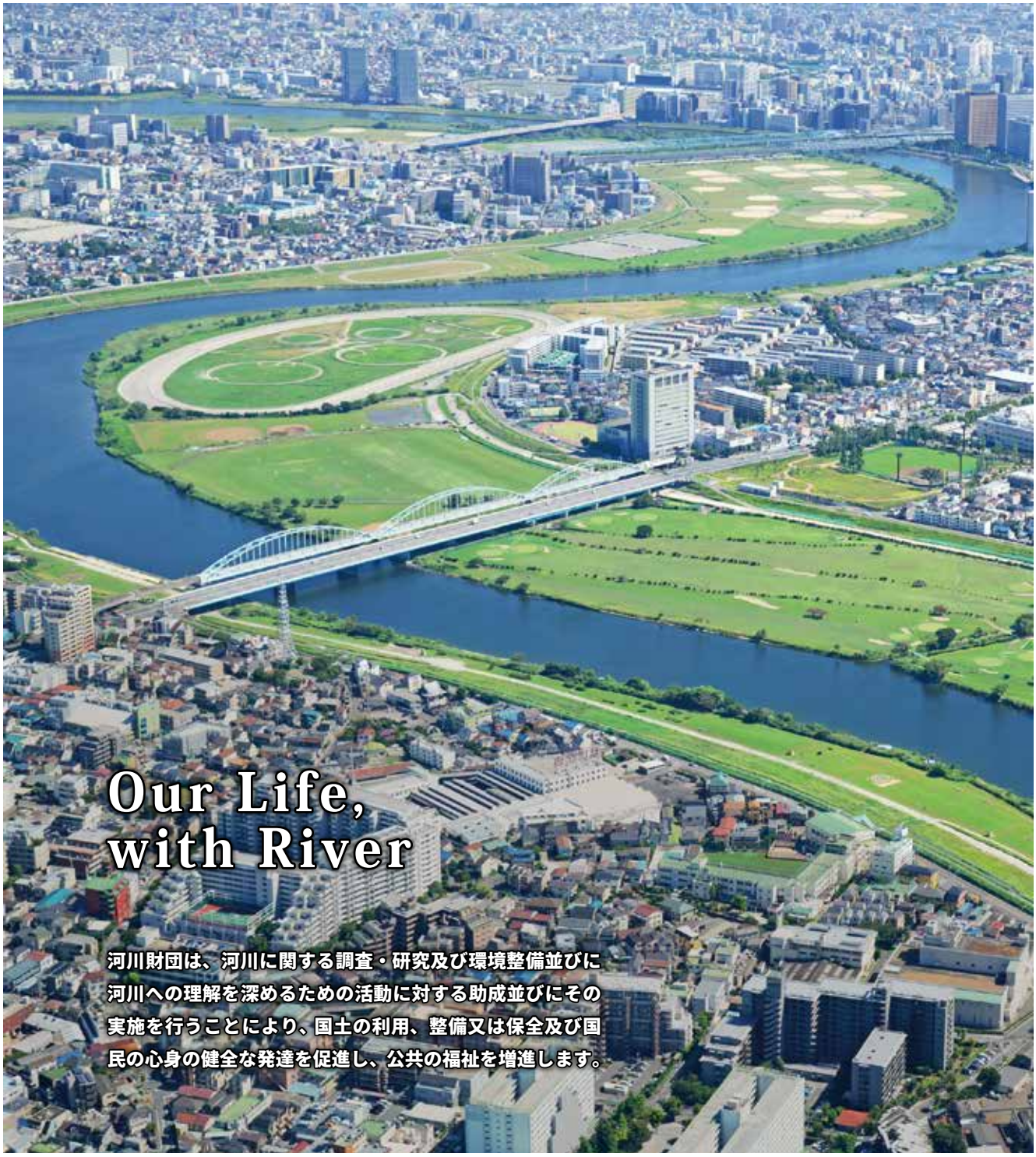
（「日本の助成財団の現状」より助成財団センター調べ　H26 年度）

助成等事業費

45 位

河川基金

RIVER FUND
河川基金だより
平成 29 年 10 月発行
Vol. 37
2017 October



●編集発行：公益財団法人　河川財団　基金事業部
本誌はホームページでもご覧になれます。http://www.kasen.or.jp

公益財団法人
河川財団

本部
〒 103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F)
http://www.kasen.or.jp　E-mail:info@kasen.or.jp

本部

総務部	TEL:03-5847-8301	FAX:03-5847-8308
経営企画部	TEL:03-5847-8302	FAX:03-5847-8308
基金事業部	TEL:03-5847-8303	FAX:03-5847-8309
子どもの水辺サポートセンター	TEL:03-5847-8307	FAX:03-5847-8314
河川総合研究所（戦略的維持管理研究所）	TEL:03-5847-8304	FAX:03-5847-8310
東京事務所	TEL:03-5847-8306	FAX:03-5847-8310

名古屋事務所
〒 463-0068 名古屋市守山区瀬古 3 丁目 710 番地
TEL052-388-7891　FAX052-388-7918
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

近畿事務所
〒 540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31（OMM13F）
TEL06-6942-2310　FAX06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp